

第三者意見

「KUBOTA REPORT 2021」に対する第三者意見



神戸大学大学院 経営学研究科
教授
國部 克彦 氏

長期ビジョン「GMB2030」の策定

今年度の報告書の最大の特徴は長期ビジョン「GMB2030」を策定され、中期経営計画とも連動され、クボタのESG経営の全体像を明確に示されたことです。これまでクボタのESG経営は、日本企業を代表する優れたものでしたが、「GMB2030」が策定されたことで、全体の戦略としての芯が通り、ESG経営として全体が統合されてきたという印象を持ちます。ESG経営は、通常の経営と同じくトップダウンだけで遂行できるものではなく、現場での実践活動なくして成果は上げられないので、今後トップと現場の「統合」によって、クボタのESG経営がどのように発展していくかがポイントになると思います。

豊かな社会と自然の循環にコミットする「命を支えるプラットフォーム」

2030年のクボタのあるべき姿として、上記の目標が掲げられています。この分野に130年の歴史を持つクボタらしい素晴らしい方向性であると思います。今後はこの「プラットフォーム」の意味をさらに掘り下げられることを期待します。「プラットフォーム」ではなく、「プラットフォーム」を称する以上、世界を良くするプラットフォームづくりに全力挙げて取り組む必要があります。その場合の重要な方向性のひとつはDXだと思います。DXについても、報告書では触れられていますが、それほど大きな取り扱いではありません。水・農業分野でのDXは本当に人間社会の死命を制するものになると思いますので、クボタの活躍を期待しています。

サステナビリティと経済の関係

クボタレポートは読みごたえのある非常にレベルの高い報告書ですが、サステナビリティと経済の関係についての方針や記述がもっと充実すれば、より素晴らしい報告書になると思います。この問題については、クボタの経営陣と国谷裕子氏のダイアログでも取り上げられていますが、両者を両立させるという回答以上の内容は読み取れませんでした。もちろん、両立させることは重要ですが、問題はどのように両立させるかです。短期的に両立させるのと、長期的に両立させるのでは、相当異なる事業戦略になります。同様に、経済的成果をどのように分配するのかという問題も、経済格差が世界的に重要視される中で、避けられない論点になるでしょう。これは、従業員に対する会社の姿勢を示すうえでも注目されると思います。

「やればできる」「失敗を恐れるな」

報告書の冒頭にある創業者久保田権四郎氏のこの言葉が強く印象に残りました。この精神があつてこそ「GMB2030」であることを期待しています。

第三者意見を受けて

國部先生より貴重なご意見を賜り、厚く御礼申し上げます。

クボタグループは2021年2月に、10年後を見据えた長期ビジョン「GMB2030」と、中期経営計画2025を策定、発表いたしました。KUBOTA REPORT 2021では、企業としての中長期的なあるべき姿をお伝えするため、この2つを軸として、2050年に向けて環境面から事業の方向性を示す「環境ビジョン」をはじめ、それらを実現するためのトータルソリューションやオープンイノベーションの具体事例などを新たに盛り込み、当社の事業とESG両面の戦略を統合したレポートとして構成しました。

國部先生からは、長期ビジョン・中期経営計画とともにESG経営の全体像を明示したことに対して、評価をいただき、大変励みになります。

その一方で、「経営トップと現場とがどう一体となってESG経営を推進していくか」、また「サステナビリティと経済をどう両立していくか」、「プラットフォームの意味をいかに掘り下げるか」など、大変重要な課題もご提示いただきました。また、「クボタの水・農業分野におけるDX」については、当社としてもイノベーションにつながるソリューションとして取り組んでまいります。これらの課題やご期待に向けて真摯に検討・努力し、今後のESG経営の推進に活かしてまいりたいと思いますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

クボタグループは、企業理念「クボタグローバルアイデンティティ」を経営の根幹に位置づけています。「食料・水・環境」におけるクボタの事業機会と社会的責任は、ますます大きくなっています。

最も多くの社会貢献をなす「グローバル・メジャー・ブランド」になることを目標に、クボタグループ4万2千人が一丸となって、持続可能な企業として社会の皆様へ信頼され必要とされ続ける企業グループをめざします。



(株)クボタ 専務執行役員
コンプライアンス本部長、人事・総務本部長、
KESG推進担当、本社事務所長、
クボタ技能研修所長
木村 一尋